

大学生の日本語表現能力に関する一考察

－「口頭表現演習」における描写の課題－

吉野文 椎名紀久子 佐藤尚子

1 はじめに

近年、学部生を主な対象とする日本語表現能力の育成は、大学教育における重要な教育課題の一つとなっており、より広い範囲の教員や学生を巻き込んで広がりつつある（大島2006: 12）。

千葉大学においても、学習・研究活動に必要な「話す」「聴く」「読む」「書く」ための能力を「コミュニケーション・リテラシー」と名づけ（千葉大学言語教育センター日本語部門2007: 19）、2006年度からコミュニケーション・リテラシー科目の設置に向けた調査・研究に着手した^[1]。2007年度には学部1年生を対象とする「文章表現演習」、「口頭表現演習」、「対人コミュニケーション」の3つの科目をパイロット授業として開講し、千葉大学の学生に適した授業の内容と方法を検討するための基礎的な資料とすることになった。

本稿では、「口頭表現演習」で課した小課題のうちの一つである「描写」を取り上げ、大学生の日本語表現能力の問題点の一端を明らかにするとともに、課題に対する意識が授業によってどのように変化したか、また、授業後に同じ課題に再度取り組んだ結果どのような変化が見られたかを考察する。

2 「口頭表現演習」のねらいと概要

「描写」の課題の説明に入る前に、まず「口頭表現演習」のねらいと概要を示しておきたい。

千葉大学では、2007年度のパイロット授業開講に向けて2006年7月に学部1年生を対象とする「学習・研究活動に必要な日本語力に関するアンケート調査」を実施した（千葉大学言語教育センター日本語部門2007: 27）。この調査では35項目の言語行動について、それらが「大学入学前にできていたこと」（レディネス）、「大学で1学期間学習してできるようになったこと」、「大学の授業の中で指導してほしいこと」（ニーズ）として該当するかどうかを尋ねている。その結果、口頭表現に関わる言語行動のうち、50%以上の学生がニーズとして挙げた項目^[2]は8項目あった（表1参照）。これらのうち、項目1～6はレディネスが50%以下であり、学生自身が大学に入るまでに十分習得していないと意識している言語行動であることがわかる。

表1 対話・発表に関わる日本語力に関する学部1年生の意識

	項目	ニーズ	レディネス
1	発表などで筋道を立てて話す	65%	47%
2	聞き手の反応を確かめながら話をしたり発表したりする	61%	48%
3	発表内容を最後に要約したり、自分や他者の発表を評価する	61%	37%
4	自分が調べたことを、定められた時間内に漏れや重複なく発表する	61%	30%
5	討論の場で自分の意見や考えを明確に述べる	58%	35%
6	討論の場で他の参加者に対して適切な質問をする	54%	27%
7	人と話すとき、自分の声の大きさや視線などに気をつける	52%	56%
8	日常会話で相手にわかりやすく話す	51%	51%

この結果をもとに、「口頭表現演習」では基本的な口頭表現能力として次のような力を養成することを目標においた。

話し手として： 筋道の通った論理的な話し方ができる

話す内容を整理し、簡潔に話すことができる

聞き手を意識して、内容や話し方を調節する

聞き手として： 他者の話を適切に評価したり質問したりできる

そして、これらの目標を実現するための活動としてインタビュー、スピーチ、グループでのディスカッションなどを組み合わせ、前半の7回で「他者紹介」、「描写」、「方法説明」、「意見表明」の4つの小課題に取り組んだ。

また、後半の8回目以降はグループ（3～4人）でのプレゼンテーションの準備と実施を受講者全員に課した。論証型の問いを各グループで一つずつ設定し、関連資料の収集、アウトライン作成などを他者との協働で行い、結果を全員の前で発表するという流れにした。後半の活動は、上述の口頭表現能力に加え、論証型の調査・研究に対する基本的な取り組み方を学ぶことを意図したものである。授業の概要は【資料1】のとおりである。

パイロット授業では、実践の積み重ねと気づきによる学習を重視し、言語行動に対する自己評価・相互評価、毎回の授業での授業評価アンケートの実施といった活動を取り入れてコースを展開した^[3]。

3 「描写」という言語表現活動

3.1 先行研究

ドイツの言語技術指導を参考に日本人の児童・生徒に対する言語教育カリキュラムを開発・実践している三森（1996）によれば、「描写文」は多くの時間を割いて訓練すべき課題であるという。また、「描写文」は「科学的記述文」と「文学的記述文」に区別され、前者は「視覚で認知できるある対象物や場所、現象などを、はっきりと目に見えるように、

事実に即して正確に、客観的な言語表現で描き出した文章」、後者は「書き手が脚色して、ある出来事や体験、風景や情景などを目に見えるように鮮やかに表現すること」とそれぞれ定義されている（三森1996: 12-13）。

本稿で取り上げる「描写」は「科学的記述文」に相当するが、三森は「科学的記述文」の訓練を通して、次の5つの技術が習得できると述べている（三森1996: 17）。

- ① 対象の観察方法
- ② 視点移動の方法
- ③ 情報整理の方法
- ④ 文章の構成方法
- ⑤ 対象の表現方法

①と②について説明を補うと、「科学的記述文の訓練では物の見方の基礎となる視点移動の方法がしっかりと鍛えられる。対象物を見ていない相手に、そのものの姿形を伝達するためには、相手が頭の中に対象物の像を描き出すことができるように、相手の思考を導いていかねばならない。そのためには伝達する側が、秩序正しく視点を移動させながら物を見る必要があるからである。これはまた論理的な思考の基礎にもなる」という（三森1996: 18）。すなわち、「科学的記述文」を書くことは、ただ何をどう書くか（③、④、⑤）を学ぶだけでなく、その前提となる物の見方や思考の訓練にもなるという指摘である。

3. 2 先行実践

3. 1 で見た三森の実践は小学生から高校生を対象にしているが（三森1996、麗澤中学・高等学校2007）、大学生に対する日本語表現能力の養成という観点から「描写」を扱った教科書もある。

上村・内田（2005）はプレゼンテーション能力の養成を目的としたテキストであるが、テクニックやツールより内容を重視すべきだとして内容中心の学習課題を設定している。そのうちユニット3は、「できるだけ視覚情報（見せるもの）に頼らず、口頭だけで情報を伝えようとする演習」（上村・内田2005: 21）として、電話で空港の中を説明するという空間の「描写」が課題となっている。このユニットでは、情報の伝え方に関して次のようなポイントが提示されている。

- ① 相手（聞き手）を知る：一般的に、相手に何かを伝えようとする時はいつも、相手がどういう人なのか、どういう状態にあるのか、ということを知る必要がある。
- ② 相手の視点に立って情報を整理する
- ③ 用語を統一し、客観的な情報と、相手の視点からの説明とをきちんと分けて伝える。
- ④ 客観的な情報を説明の最初と最後に述べる。

これらの項目は先の「科学的記述文」が目指す技術とほぼ重なりと言え、「描写」で求められる能力は、大学生にとってもプレゼンテーション能力の土台となる基礎的な日本語表現能力であることがわかる。

4. 研究の目的と方法

学習・研究に必要な日本語能力の養成に関しては多くの成果が共有されつつあるが、管見の限りでは、学生の言語産出を実証的に分析したものは必ずしも多くない。

そこで、本稿では「口頭表現演習」の中で実践した「描写」を取り上げ、学生の日本語表現能力と気づきを分析し、実践上の問題点とともに考察する。

「描写」を課題とした第4回目の授業は次のような手順で行った。

- (1) 4種類の国旗の絵を人数分用意し、一人1種類ずつ受け取って描写を考える。構成メモおよび原稿を書く。
- (2) 異なる絵を持つ4名で一つのグループを構成し、自分の絵を見ていない他の3名がその国旗を描けるように(1)の原稿をもとに言葉だけで伝える。聞き手は説明をもとに絵を描く。
- (3) グループ全員の描写が終わったらお互いに絵を見せ合い、描写の適切さ、正確さがどのような要因に基づくのかを話し合う。
- (4) グループで話し合った結果を全体で共有し、教師が必要に応じて補足する。
- (5) この時間の授業を通して気づいたことを授業評価アンケートに記入して提出する。
- (6) 宿題として旗の描写を書き直す。

以下では、まず(2)の口頭による描写を文字化したもの(データ1)をもとに大学1年生の描写力がどのようなものかを分析する。次に、(5)の授業評価アンケートに書かれた気づきの内容(データ2)を分析し、授業を通して学生が何をどのように意識したかを検証する。その上で、(6)の段階、すなわち授業後に宿題として書き直した原稿(データ3)を用いて、フィードバックによって言語表現がどのように変化したかを考察する。

なお、本授業の受講者は計23名で全員千葉大学1年生であった。内訳は以下のとおりである。全員本人の希望により受講した。

表2 「口頭表現演習」受講者内訳(2007年度前期)

学部別	文学部2・教育学部4・法経学部5・理学部4・医学部1・看護学部2・工学部4・園芸学部1
性別	女性16・男性7

5. 結果と考察

5. 1 データ1

ここでは、4種類の国旗について計19人分のデータを分析の対象とする^[4]。

高校1年生に国旗の描写をさせてその評価を行なった三森の実践（麗澤中学・高等学校 2007:23-28）を参考に、描写によって旗が正確に再現できるかどうかという観点から、【資料2】に示した4種類の国旗それぞれについて以下の6つの項目から評価をした。③、④の要素は旗のデザインによって異なるが、③は全体に関わるデザイン、④は特徴的な部分の描写と考えて区別した。各項目は、何も問題がなければA、不正確あるいは曖昧なため正しく再現することができない可能性がある場合はB、正しく再現することが困難な場合はCと評価した。

表3 評価の観点

セーシエルの国旗	チュニジアの国旗	サモアの国旗	マレーシアの国旗
①話題提示			
②全体の形			
③4つのブロックの形・位置	③地の色と白丸の位置・大きさ	③全体と部分の位置関係・色	③全体と部分の位置関係・地の縞模様
④各ブロックの色	④月と星の形・位置・大きさ・色	④星の形・位置・大きさ・色	④月と星の形・位置・大きさ・色
⑤まとめ			
⑥問題点（過度の冗長性・主観的なコメントなど）の有無			

19名のデータをこの基準で評価した結果、①～⑥のすべてがAであったものは2名しかいなかった。例1は、全項目がAと判定された描写であるが、色の境界となる線の引き方が的確かつ簡潔に聞き手に伝えられていることが観察できる（斜線部が学生の発話）。

〔例1〕

- | | |
|------------|---|
| ①話題の提示 | っとセーシエルの、国旗の説明をします。 |
| ②全体の形 | 旗の形は横に長い長方形です。 |
| ③ブロックの形・位置 | 長方形の上の辺を、3等分する点を作って下さい。
また、長方形の右の辺を3等分する点をまた作って下さい。
左下の角から、今引いた4つの点に向かって、直線を引いて下さい。 |
| ④各ブロックの色 | あ、左下です、ごめんなさい。左下の角から、
で、色は、一番左のブロックが青色。隣が、黄色、赤、白、一番下が緑色です。 |
| ⑤まとめ | これで説明を終わります。 |

次に、観点ごとにA、B、Cの数を集計し、描写のどのような側面にどのような問題が表出しているかを見てみたい。

表4 観点ごとに見た評価の分布

	評価A	評価B	評価C
観点①	17	1	1
観点②	9	3	7
観点③	9	4	6
観点④	6	9	4
観点⑤	17	1	1
観点⑥	12	5	0

表4からわかることは、記述に問題がある評価B、評価Cが多いのは具体的なデザインを描写する部分(②、③、④)だということである。もっとも、観点②は一般的な国旗の形(横長の長方形)を共有知識と考えて説明が省略された可能性がある。そこで、これを除いた③、④に絞って見てみると、問題点を以下のように類型化することができた(カッコ内は問題として表れた回数を示す)。

- 要素を言い落としている場合 (15)
- 用語が不適切である場合 (9)
- 説明または用語があいまいである場合 (4)
- 間違った説明をしている場合 (3)
- 部分から説明を始めている場合 (2)

一人の学生の描写に複数の問題がある場合もあり、これらを集計すると33ヶ所に上った。このうち、最も多いのは要素の欠落である。国旗の描写は平面的なデザインの描写で、形、位置、大きさ、色の説明が必要である。これらの要素の一つを言い忘れたり、細部の説明が不適切だったりすることが多く見られた。

例2は、構成は整っているものの、地の色への言及がなく、色や形の描写も不適切な部分があり、このままでは聞き手に正確には伝わらない描写となっている。

〔例2〕

- | | |
|----------------|---|
| ①話題の提示 | チュニジアの国旗を説明します。 |
| ②全体の形 | 日本の国旗のように長方形で、 |
| ③地の色と白丸の位置・大きさ | 中心に円が描かれています。 |
| ④月と星の説明 | さらに、その円の中に、白い、白色の丸いボールが入っていて、右端で円とボールが接しています。
そしてそのボールの中には、一つ、大きな星の絵が描いて |

あります。

その円の中を全体的に見ると、三日月の中に星が入っているように見えます。

⑤まとめ

以上です。

また、例3は例1と同じセーシェルの国旗を説明したものである。この例ではブロックの形・位置を伝える表現に問題があることが見て取れる。下線部に説明のあいまいさ、間違った説明が見られるだけでなく、冗長で主観的な表現が混じった描写になっている。

〔例3〕

①話題の提示

えー、先に言っときますが、せ、セーシェルめっちゃ難しい。
どこにあるかも知りません。

②全体の形

えーっと、セーシェルの国旗は、横長の、長方形です。

③ブロックの形・位置

左下の角を出発点に、右上に向かうように放射線状に5つ
の色が、広がっています。

まあだめもとでxxx。

④各ブロックの色

えー、旗の全部分はその5つの色に染まります。

ということ。意味わかんない。

5つの色は、えー、むかって、左側から青、黄色、赤、白、緑。

青、黄色、赤、白、緑。

③ブロックの形・位置

えーと、次のとこ何言ってるかわかんないと思うんで聞き逃
してもいいですけど。

えーとちょうど左上の90度の角のところに青、えー、右上の90
度の角、のところに赤、右下の90度の角のところに緑がくる
感じですよ。

xxxおれが、おれが悪いじゃん。しょうがない

5つの色の面積は、等しいわけではなく、えー5つの色の、中
で、最も面積が小さいのが白で、逆に最も面積が大きい部分
が赤、になっております。

⑤まとめ

えー、みなさんどうか、頑張って下さい。

これ無理だ。（中略）

終わり。

（xxxは聞き取れない部分を示す）

5. 2 データ2

ここでは、描写の授業の終わりに学生が授業評価アンケートに記した気づきの分析を行う。描写に関わるコメントが23名から計58得られた。その内容を分類してみると、以下のように整理できる（「 」内は記述例）。

(1) 聞き手の意識化

- 自分とは異なる聞き手の存在・聞き手の認知状態への気づき
「大きな特徴も言い方次第で聞き手の印象に残らず流されてしまうことに気付いた」
「相手は知らないという前提で説明しなければならない」
- 聞き手が多様であることへの気づき
「同じ言葉でもみんなが持っているイメージがバラバラだった」
この活動では「描写文」として文章を構成するだけでなく、作成した文章を複数の聞き手に伝えることを経験させた。そのため、自分の発信した情報が相手にどのように受け取られたか、すなわち受け手からのフィードバックを目に見える形で直接得ることができた。そのため、聞き手の意識化が進んだと考えられる。

(2) 表現の方法の意識化

- 視覚情報を言語で正確に表現することの難しさへの気づき
「普段は説明をしたとしても、『～な感じ』とか『～みたいな形』のように説明することが多いので、正確に物を伝えることの難しさを改めて感じた」
- より客観的な説明・情報が必要であることへの気づき
「客観的にわかる情報を提供しないと、情報は正確に伝わらない」
三森が「描写文」を通して習得できる技術として5番目に挙げた「対象の表現方法」にかかわるところであり、視覚情報に頼らないという条件を付けたことで、意識化されたものと考えられる。

(3) 視点移動・情報整理の意識化

- 図形の描写で伝えるべき情報への気づき：位置、大きさ、比率、順番、過不足ない情報など
データ1の分析で見た要素の言い落としを反映したものである。「視点移動の方法」（順番）、「情報整理の方法」、またその前提となる観察が十分であったかを問うものと言える。

(4) コミュニケーションに対するメタ意識

- 会話の前提への気づき
「私たちが普段人と接する時は、視覚からの情報に大きく頼っている」「情報を伝達する時、ある程度暗黙の了解にしたがっている」

このような情報伝達そのものに対する気づきも少数であるが見られた。

5.3 データ3

ここでは、授業後に宿題として書き直された描写文の分析を行う。授業時間内の描写との比較が可能な15名分のデータを対象にする。

5.1で焦点を当てた③～④の部分の問題点に関して、何らかの改善点があったものは15名中12名で、全体の80%である。マレーシアの国旗を描写した学生の例を以下に示す。事前・事後のいずれも話題提示とまとめがないものの、③、④の部分に限って見てみると、視点の移動が改善され、細部の描写も再現可能なものになっていることがわかる。

〔例3-1〕授業内

(①話題提示)

(②全体の形)

③全体と部分の位置

④月と星の説明

左上の隅に-, 青い横長の長方形の形があって-, その長方形の中に-, 左側に黄色い月, 右側には14本のとがっている-, のがついている黄色い星のマークがあります。

③全体と部分の位置・地の模様

その外側は-, 赤白の順番の横の縞模様で-, 赤が7本, 白が6本. です。

(⑤まとめ)

〔例3-2〕書き直し

(①話題提示)

②全体の形

③全体と部分の位置・地の模様

④月と星の説明

この旗の形は横長の長方形です。

左上には青い横長の長方形、その外側は赤・白の順の横のしま模様で、赤が7本、白が6本で、アメリカの国旗のような見た目になっています。

青い長方形の中央には、右側に14本のとげのついた黄色い星があり、左側にはその星の半分より少し左側を包み込むような、細めで円に近い黄色い三日月があります。

(⑤まとめ)

このように、データ1の分析で見られた問題点は概ね授業内のフィードバックを通して認識され、改善に結びついていた。また、1回目の描写に問題がなかった2名の学生も書きなおしによって、さらに描写が精緻化されたものになっていた。

6. まとめ

「科学的記述文」は基礎的な言語能力であり、初等・中等教育の間に多くの時間をかけてくり返し練習すべきものであるという主張がある（三森1996）が、国旗の描写は平面の記述であり、処理する情報量も多くないことから、当初は大学生にとっては難しい課題ではないと考えていた。ところが、大学生であっても実際には完全な描写をすることは必ずしも容易ではなく（データ1）、気づきの記述の中に「難しい」という言葉を含むものは14件に上った（データ2）。

今回の分析結果から二つの問題の存在が推測される。一つは、情報の整理やその前提となる観察が十分に出来ていない可能性、またもう一つは、的確な表現に結びつく語彙の選択の問題である。論理的思考、批判的思考を必要とするより応用的な課題に取り組むためには、こうした基礎的な日本語表現能力の土台を確実に身につける必要があるように思われる。

注

[1] 本調査は千葉大学の「教育に関する重点事業経費 及び 学長裁量経費等」（代表者：椎名紀久子）における「日本語コミュニケーション能力養成科目設置に向けたカリキュラムと教材開発に関わる経費の助成」により実現した。本事業の目的は、千葉大学・普遍教育における日本語コミュニケーション能力養成科目の設置に向けて、千葉大学独自のカリキュラム開発とシラバスをデザインし、その教材と指導法の開発と共に、ファカルティ・ディベロップメントを行うことにある。

[2] ここでいう「ニーズとして挙げた項目」とは、「大学の授業の中で指導してほしいこと」として「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答した者の比率が高いものを指している。

[3] 授業の目標・方法のデザインに当たっては、2006年度千葉大学コミュニケーション・リテラシー教育研修会の講師の方々、特に大島弥生氏・藤田哲也氏・上村和美氏・馬場眞知子氏・田中佳子氏の発表から多くの示唆を得た。

[4] 授業には23名出席していたが、録音状態により4名分は文字化ができなかった。

引用文献

- 上村和美・内田充美(2005)『プラクティカル・プレゼンテーション』くろしお出版
- 大島弥生(2006)「日本国内の大学における日本語表現能力育成の概観—」『大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発：統合・協働的 アプローチ』(平成15～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、課題番号15320065、研究代表者：大島弥生)
- 三森ゆりか(1996)『言語技術実践シリーズ③「描写文」の訓練で力をつける』明治図書
- 千葉大学言語教育センター日本語部門(2007)『千葉大学における学生のコミュニケーション・リテラシーの養成に向けて—2006年度版—』
- 麗澤中学・高等学校(2007)『文部科学省研究開発学校平成18年度(研究第3年次)研究報告会—麗澤中学・高等学校 言語技術フォーラム 研究報告書』

【資料1】 2007年度パイロット授業「口頭表現演習」概要

- 第1回 ガイダンス、プリ・テスト、アンケート
- 第2・3回 小課題（1） 他者紹介
学生同士ペアでインタビューを行い、クラスメートに紹介する
- 第4回 小課題（2） 描写
国旗のデザイン・部屋の見取り図を言語表現のみで伝える
- 第5・6回 小課題（3） 方法説明
各自がよく知る「方法」を3分間で説明する
- 第7回 小課題（4） 意見表明
各自が選んだ新聞記事を簡潔に紹介し、それに対する自分の考えを述べる
- 第8～12回 グループでのプレゼンテーション
論証型の調査・研究に対する基本的な取り組み方を学ぶ。
- 第13・14回 発表会
- 第15回 発表のフィードバック、ポスト・テスト

【資料2】 描写の課題で用いた4種類の国旗

以下の図柄である。実際はカラーコピーしたものを用いた。なお、ここでは縦横の比率は変えずに適宜縮小してある。

セーシェル (5色)	チュニジア (2色)	サモア (3色)	マレーシア (4色)
			